

Clindamycin の臨床的研究

勝 正 孝

川崎市立病院長 慶大内科客員教授

藤 森 一 平

川崎市立病院内科医長 慶大内科講師

小川 順一 伊藤 周治・安倍 達 島田 佐仲

川崎市立病院内科

I. はじめに

クリンダマイシン(7-Chlorolincomycin)は最近アメリカ Upjohn 研究所で開発された新抗生剤で, Lincomycin の OH-基が Cl に代つたもので, 水に溶けやすく, 毒性少なく, きわめて安定な物質である。その抗菌スペクトラムは Lincomycin とほぼ同様で, 狭域であるが, 耐性ブ菌に対してはすぐれた抗菌力を示すといわれている。

われわれはクリンダマイシンの供与を受け, 血中濃度, 各種感染症に対する臨床成績, 副作用, 血液動態, 肝機能, 腎機能などにおよぼす影響につき検討も加えたので報告する。

II. 血中濃度

表1に示すように, 3例の健康女子(20~23才)にクリ

表1 クリンダマイシン 150 mg 経口投与時の血中濃度(3例) mcg/ml

症例	氏名	1	2	4	6	8 hr.
1		1.48	0.7	0.51	0.29	0.29
2		1.56	0.84	0.72	0.34	0.32
3		1.80	1.51	1.02	0.70	0.62
平均		1.61	1.01	0.75	0.44	0.41

表2 各種感染症に対するクリンダマイシンの臨床成績7例 (川崎市立病院内科)

患者氏名	年齢	性	疾患名	検出菌	投与量および期間	効果	副作用
1	47	女	細菌性肺炎	常在菌	600 mg×32日間	有効	(-)
2	70	男	細菌性肺炎	常在菌	600 mg×11日間	有効	(-)
3	33	男	気管支拡張症	常在菌	600 mg×30日間	無効	(-)
4	51	女	気管支炎	常在菌	600 mg×10日間	有効	(-)
5	67	男	気管支炎	常在菌	600 mg×9日間	有効	(-)
6	54	女	気管支炎	常在菌	600 mg×14日間	有効	(-)
7	69	女	亜急性細菌性心内膜炎	緑連鎖菌	900 mg×5日間 1500 mg×7日間	無効	鼓腸
8	15	男	化膿性髄膜炎	陽性球菌	900 mg×14日間	著効	軟便

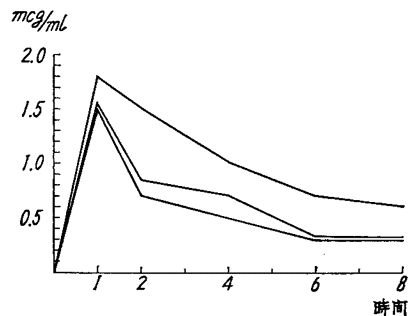
ンダマイシン 150 mg を1回経口投与し, その後時間を追つて, おのおの1, 2, 4, 6, 8時間目に静脈血を採取し, その血清について *Sarcina lutea* を検定菌とする鳥居・川上重層法により抗生物質濃度を測定した。

ピークはすべて1時間後にあり, 平均 1.61 mcg/ml で, 以後漸次下降し, 8時間後には平均 0.41 mcg/ml の濃度となる(図1参照)。

III. クリンダマイシンの臨床使用成績

表2に示すように, 細菌性肺炎2例, 気管支拡張症1例, 気管支炎3例, 亜急性細菌性心内膜炎, 化膿性髄膜炎おのおの1例, 計8例に, 1日 600~900~1,500 mg を4~3回に分けて投与し, その臨床成績について検討した。

図1 クリンダマイシン 150 mg 投与時の血中濃度



1) 呼吸器感染症に対するクリンダマイシンの効果

細菌性肺炎 2 例に対しては 1 日 600 mg を 11, 32 日間
の投与で有効, 気管支拡張症 1 例では 1 日 600 mg 30 日
間投与したが喀痰完全に消失せず, 効果が認められな
かつた。比較的咳嗽, 喀痰の多い気管支炎 3 例では喀痰劑
を併用し, 1 日 600 mg, 9~14 日間の投与で治癒した。

呼吸器感染症の代表的な症例として症例を示す。

症例 1 47 才 女

主訴, 咳嗽, 咳。

昭和 42 年 12 月 27 日より感冒にかかり熱感, 咳
痰, 咳嗽あり, 年末のこととて医師にもかからずに売薬
を服用していた。正月 1 日頃より咳嗽ひどく, 胸苦しさ
を覚えるようになったので, 43 年 1 月 4 日本院外来
を訪れ, 胸部レントゲン検査の結果, 肺炎と診断され,
直ちに入院した。

既往歴として 5 年来粘液水腫に罹患, 甲状腺末を服用
している。

入院時現症, 体格小, 栄養良好で体温 37℃, 浮腫な
く, 貧血認めず, 血圧 114/72 mm/Hg, 胸部打診上所見
ないが, 聴診で右胸下部に小水泡音を多数きく。腹部,
四肢に所見なし。

入院諸検査成績は表 3 に示すとおりで, 咳痰, 胸部 X
線所見より細菌性肺炎を診断した。図 2 に示すように,
直ちにクリンダマイシンを 1 日 600 mg (4 回に分服) と
オキシフェンブタゾン を 1 日 600 mg を 3 日間, 以後
1 日 300 mg 併用し, 薬剤投与後, 咳嗽, 咳痰間もなく
好転, 胸部 X 線陰影も約 3 週間で消失した。クリンダマ
イシンは 1 日 600 mg と 32 日間連続投与したが, 認む
べき副作用はなかつた。

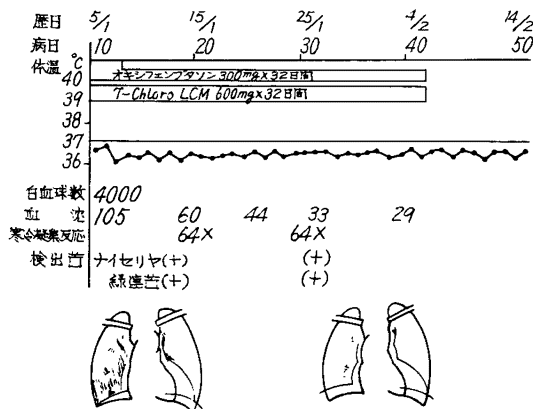
2) 亜急性細菌性心内膜炎

亜急性細菌性心内膜炎 1 例にクリンダマイシンを投与

表 3 入院時諸検査成績 (例)

血液像 (8/I)	K	4.3 mEq/L	
赤血球数	413 万		
血色素量	12.4 g/dl	肝機能検査 (8/I)	
ヘマトクリット	38%	黄疸指数	5
白血球数	4,000	T.T.T.	18.2 単位
好中球	67%	Z.T.T.	19.2 単位
好酸球	0%	アルカリフォスファターゼ	11.5 単位
リンパ球	31%	総コレステロール	224 mg/dl
単球	2%	S-GOT	45 単位
検尿 (8/I)		S-GPT	45 単位
蛋白	+	その他 (8/I)	
糖	-	CRP	卅卅
ウロビリノーゲン	+	LFT	-
沈渣赤血球	-	ASLO	333 単位
白血球	1-2/毎	寒冷凝集反応	64×
扁平上皮細胞	2-3/毎	赤沈値 (1 時間)	105 mm
検便 (8/I)		残余窒素量	20~30 mg/dl
潜血反応 (-)	虫卵 (-)	咳痰培養 (6/I)	
血清蛋白分画 (8/I)		グラム陰性球菌	(+)
総蛋白量	7.0 g/dl	緑連鎖菌	(+)
A/G 比	0.65	心電図	
アルブミン	39.3%	心筋障害あり	
α-グロブリン	11.8%	胸部 X 線検査	
β-グロブリン	17.7%	右肺下野にびまん性陰影あ	
γ-グロブリン	31.2%	り	
血清電解質 (8/I)			
Na	143 mEq/L		
Cl	107 mEq/L		

図 2 47 才 ♀ 細菌性肺炎 (川崎市立病院内科)



したが効果がなかつた。

症例 7 69 才 女 亜急性細菌性心内膜炎

主訴, 発熱。

42 年 12 月 21 日より 38.5℃ に及ぶ発熱あり, 近
医にて感冒といわれて治療を受けたが軽快せず, 43 年 1
月 3 日より医師をかえ, シンセベン投与を受け, やや
下熱傾向みだが, 思わしくないため精査のため本院を訪
れ 43 年 1 月 9 日入院した。

既往症, 19 才, 腸チフス, 57 才, 胆のう炎に罹患, 57
才, 虫垂切除, 62 才より高血圧症にて治療中であつた。

入院時現症, 体格中等, 栄養やや衰えた女子。体温
38℃, 両手指にオスラーの痛点を認む。出血斑なし。血
圧, 198/112 mm/Hg, 胸部心濁音界 1 横指幅拡大, 心尖
部に III 度の収縮期雑音をまく。肝腫なく, 脾腫をふれる。

表4 入院時諸検査成績(例)

<u>血液像</u>		<u>血清電解質</u>	
赤血球数	355万	Na	146 mEq/L
血色素量	10.0 g/dl	Cl	116 "
網赤血球	6%	K	4.4 "
ヘマトクリット	32%	Ca	5.4 "
血小板数	18×10 ⁴	<u>検便</u>	
白血球数	7,700	潜血(-)	虫卵(-)
好中球	68%	<u>肝機能</u>	
好酸球	0%	黄疸指数	6
リンパ球	32%	Z.T.T.	9.6単位
単球	1%	アルカリフォスファターゼ	4.8単位
<u>検尿</u>		<u>血清コレステロール</u>	
蛋白	(±)	144 mg/dl	
糖	(-)	S-GOT	21単位
ウロビリノーゲン	(±)	S-GPT	15単位
赤沈値(1時間)	31 mm	<u>血液培養 (9/1, 10/1, 11/1)</u>	
<u>血清蛋白分画</u>		緑連鎖菌検出	
総蛋白量	7.0 g/dl	CRP	卅
A/G 比	1.62	LFT	-
アルブミン	62.2%	ASLO	166単位
α-グロブリン	8.5%	<u>胸部X線</u> 所見なし	
β-グロブリン	10.4%	<u>心電図</u> 心筋障害	
γ-グロブリン	18.9%		

四肢に所見なし。

諸検査成績は表4に示すごとくで、動静脈培養にて3回緑連鎖菌を検出した。発熱と心雑音、オスラー痛点などと考え合わせて亜急性細菌性心内膜炎と診断した。

経過は図3に示すごとくで、クリンダマイシン1日量900 mg 投与5日間行なつたが、菌血症はいちおう消失したものの、発熱なおつづくので、さらに1日1,500 mgに増量した。しかし発熱なおつづき、赤沈値改善も著明でないので、ペニシリンに変更し、下熱し、以後経過順調で治癒退院した。

なお本例では副作用として軟便がみられたが、投与を中止するほどのものではなかつた。

3) 化膿性髄膜炎

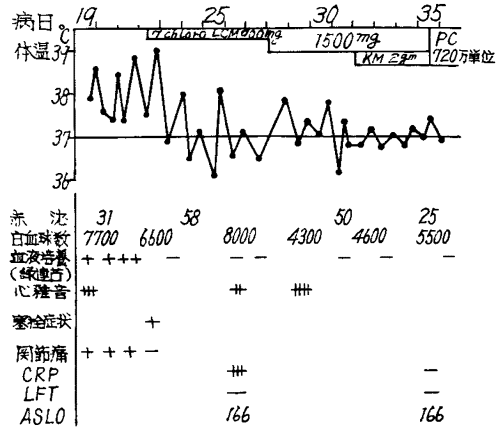
化膿性髄膜炎1例にクリンダマイシンを投与し、著効を認めた。

症例8 15才 男 化膿性髄膜炎

主訴、発熱、けいれん。

43年1月3日朝より頭痛を訴え、同日夕方発熱け

図3 69才 ♀ 亜急性細菌性心内膜炎 (川崎市立病院内科)

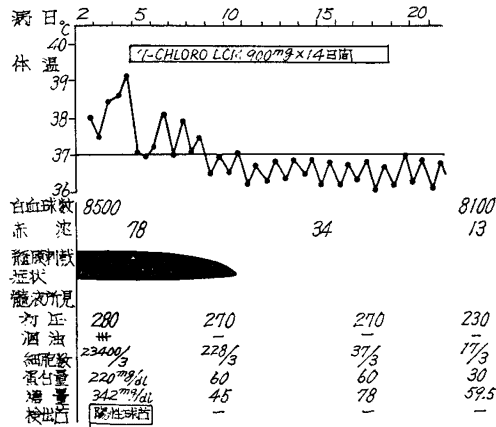


いれんあり、近医に感冒といわれた。しかし、間もなく意識障害あり、けいれん 30分~1時間おきに起こるので某病院に入院し、髄液検査を受けたところ、髄膜炎

表5 入院時諸検査成績(例)

<u>血液像</u>		A/G 比	1.50
赤血球数	496万	アルブミン	60.0%
血色素量	14.8 g/dl	α-グロブリン	6.7
ヘマトクリット	42%	β-グロブリン	15.0
白血球数	8,500	γ-グロブリン	18.3
好酸球	60%	<u>検便</u>	
好中球	0	虫卵(-)	潜血(+)
リンパ球	39%	<u>血清電解質</u>	
単球	1%	Na	135 mEq/L
<u>検尿</u>		Cl	107 "
蛋白	卅	K	4.1 "
糖	卅	<u>肝機能</u>	
ウロビリノーゲン	±	黄疸指数	4
赤沈値(1時間)	78 mm	T.T.T.	2.4単位
CRP	卅卅	Z.T.T.	5.8単位
<u>髄液所見</u>		アルカリフォスファターゼ	6.3単位
初圧	280 mm/H ₂ O	総コレステロール	200 mg/dl
濁濁	卅	S-GOT	69単位
細胞数	7,466	S-GPT	38単位
蛋白量	220 mg/dl	<u>胸部X線</u> 所見なし	
糖量	342 mg/dl	<u>心電図</u> 所見なし	
検出菌	陽性球菌		
<u>血清蛋白分画</u>			
総蛋白量	8.0 g/dl		

図4 15才 ♂ 化膿性髄膜炎 (川崎市立病院内科)



髄膜炎といわれ1月5日本院を訪れ入院す。

入院時現症として、体格小、栄養やや衰えた男子。体温 38℃、項部強直著明、ケルニヒ症状を認む。意識はやや濁す。胸部、腹部に所見なし。

入院諸検査成績は表5に示すごとくで、膿性の髄液を得、塗抹標本にてグラム陽性球菌を証明(培養不成功)した。発熱と頭痛、項部強直、ケルニヒ症状などの臨床症状と考え合わせ、化膿性髄膜炎と診断した。

クリンダマイシンを1日900mg投与したところ、図4に示すように5日後には完全に下熱し、同時に髄膜刺激症状消失し、髄液も10日後には全く清透となった。

なお本例ではクリンダマイシン投与後間もなく軟便が認められた。

IV. 副作用

臨床例について述べたように、8例に投与し、2例に副作用として、鼓腸1例、軟便1例を認めた。いずれも1日投与量が900mg以上のもので、細菌性心内膜炎1例では900mg5日間、ついで1,500mg7日間であったが、投与中止するほどのものではなかつた。また化膿性髄膜炎1例は900mg14日間投与したか、投与開始間もなく1日3~4回の軟便がみられた。

つぎに入院患者5例について、クリンダマイシン投与前後の赤血球数、白血球数、血小板数の変動について調査した。図5に示すように赤血球数は甲状腺機能低下症に合併した細菌性肺炎を1例にクリンダマイシン1日600mg、32日間投与後に貧血を認めた以外はほとんど変動がみられなかつた。白血球数、血小板数については、いずれも病的減少な認められなかつた。

また図6に示すように肝機能としてGOT, GPTのクリンダマイシン投与前後の変動をみたが病的上昇はな

図5 クリンダマイシン投与前後の血液体の変動

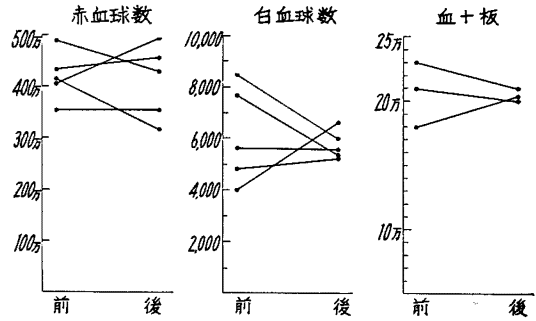
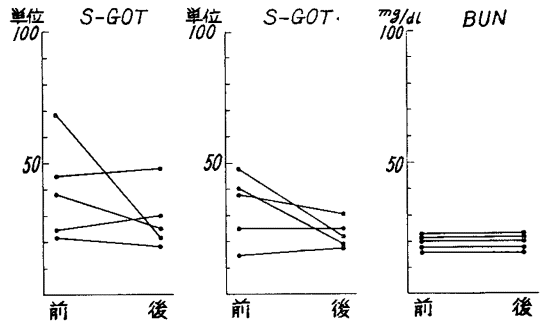


図6 クリンダマイシン投与前後の肝機能、腎機能の変動



く、腎機能としてBUNの変動をみたが、なんら変動を示さなかつた。

V. まとめ

以上、私どもは新抗生剤クリンダマイシンの血中濃度、各種感染症8例に対する治療効果、副作用、投与前後の血液動態、肝機能、腎機能を検討し、つぎの結論を得た。

1) 健康女子3名にクリンダマイシン150mgを1回経口投与すると、ピークは1時間後にあり、平均1.61mcg/mlで、以後漸次下降し、8時間後には平均0.41mcg/mlの濃度となる。

2) 細菌性肺炎2例、気管支拡張症1例、気管支炎3例の呼吸器感染症にクリンダマイシンを1日600mg、9日~32日間投与し、細菌性肺炎2例、気管支炎3例に有効であった。また亜急性細菌性心内膜炎に1日900~1,500mg、12日間投与し、血中菌の消失をみたが下熱せず結局無効であった。また化膿性髄膜炎1例にクリンダマイシン900mgを14日間投与し、著効を得た。

3) 副作用としては、8例中2例に鼓腸と軟便それぞれ1例に認めた。いずれも1日900mg以上の投与例であった。なお入院患者5例については血液像(赤血球数、白血球数、血小板数)、肝機能(S-GOT, S-GPT)、腎機能(BUN)のクリンダマイシン投与前後の変動を調査した。甲状腺機能低下症に合併した細菌性肺炎の1例

にクリンダマイシン投与後軽度の貧血を認めた以外は、特に変動がみられなかった。

参 考 文 献

1) R. J. MACERLEIN, R. D. BIRKENMEYER & F.

KAGEN: Clinical modification of lincomycin, Antimicrob. Agents & Chemoth. p. 727~736, 1966

2) Clinimycin Medical Brochure. June 1967, The Upjohn Company

CLINICAL EXPERIENCES WITH CLINDAMYCIN

MASATAKA KATSU, IPPEI FUJIMORI, JUNICHI OGAWA, SHUGI ITO,
SACHU SHIMADA & TOHRU ABE
Kawasaki City Hospital

Purpose of this paper is to describe clinical evaluation of clindamycin prescribed to 8 patients with various infectious diseases.

Patients treated were 2 of bacterial pneumonia, 3 of bronchitis, each 1 of bronchiectasis, subacute bacterial endocarditis (SBE) and purulent meningitis.

Patients were consisted of 4 males and 4 females and age of patient ranged from 15 to 70 year-old.

Clinical efficacy of clindamycin in bacterial pneumonia and bronchitis was good and in purulent meningitis excellent but it was not effective in bronchiectasis and SBE.

Causative organism in bacterial pneumonia and bronchitis was normal inhabitant. Although clindamycin was sensitive to *St. viridans* isolated from SBE by disc method, clinically it was not effective.

Gram positive bacilla were isolated from purulent meningitis.

Dosage of clindamycin in bacterial pneumonia and bronchiectasis was 600 mg q.i.d., and duration was varied from case to case. They were from 9 days to 32 days. SBE was treated with clindamycin 300 mg three times daily for 5 days. Bacteremia was disappeared but fever spiked up to 38°C frequently and no improvement of sed-rate was obtained. Clindamycin was increased to 1,500 mg daily for 5 days. Even with this dosage, fever stayed to be high, and clindamycin was replaced by penicillin. In purulent meningitis, clindamycin of 300 mg three times daily for 14 days were prescribed. After 5 days, fever became normal and meningeal signs were disappeared.

No serious side effects were noted except meteorism in SBE who was treated by more than 900 mg and loose stool in purulent meningitis.